

## 英語学・英語教育学 3大学卒論発表会 (Zoom)

下記の通り、名古屋市立大学・三重大学・南山大学の英語学・英語教育学関連の合同卒業論文発表会を開催します。興味のある方は、自由にご参加ください（部分参加可）。

問い合わせ先：名古屋市立大学・日木満 (hiki@hum.nagoya-cu.ac.jp)

記

### Zoom

トピック: 3大学合同卒論発表会 (英語学・英語教育学)

<https://us02web.zoom.us/j/88437827559>

ミーティング ID: 884 3782 7559

パスコード: 282944



### 1月29日(土) 10:00~16:30

- 10:00 挨拶
- 10:05~11:05 発表 1~4 (15分きざみ: 発表は **10分以内**、質疑応答・コメント (**4分程度**))
- 11:05~11:10 休憩 (時間調整含む)
- 11:10~12:10 発表 5~8
- 12:10~13:00 昼休み
- 13:00~14:00 発表 9~12
- 14:00~14:05 休憩 (時間調整含む)
- 14:05~15:05 発表 13~16
- 15:05~15:30 参加者コメント、教員講評 (25分)
- 15:30~15:40 休憩と Breakout Session への移行 (10分)
- 15:40~16:30 Breakout Session で 3大学学生交流会 (50分)

### 1月30日(日) 10:00~16:20

- 10:00 挨拶
- 10:05~11:05 発表 17~20 (15分きざみ)
- 11:05~11:10 休憩 (時間調整含む)
- 11:10~12:10 発表 21~24
- 12:10~13:00 昼休み
- 13:00~14:00 発表 25~28
- 14:00~14:05 休憩 (時間調整含む)
- 14:05~14:50 発表 29~31
- 14:50~15:20 参加者コメント、教員講評、まとめ (30分)
- 15:20~15:30 休憩と Breakout Session への移行 (10分)
- 15:30~16:20 Breakout Session で 3大学学生交流会 (50分)

お願い:

(1) Zoom入室の際の「名前」は以下のようにお願いします。

大学生: ○○大○年氏名 (例: 名市大4年 日木満)

教員: ○○大/高校/中学教員 氏名 (例: 名市大教員 日木満)

一般(その他): 一般 氏名 (例: 一般 日木満)

(2) 学生の発表を聞かれた方は、是非、その学生への感想等を Google フォームで送ってください。  
下記の URL か QR にアクセスして下さい。

1日目(29日) 2日目(30日)

1日目(29日): <https://forms.gle/2cPiEHBeepDfKMPe7>

2日目(30日): <https://forms.gle/D3FDdYKaSePbCd3H8>



1日目： 1月29日（土）

時間	発表#	氏名（大学）	卒論題目
10:05	発表 1	碧山 美奈 (名古屋市大 1)	第三の統語的使役動詞 put
10:20	発表 2	大柳 竜一 (名古屋市大 2)	User Interface テキストを対象にした Google 翻訳と人間翻訳の比較 —UI 翻訳者の存在意義を求めて—
10:35	発表 3	川瀬 裕之 (名古屋市大 3)	【A is B in C】(A は C が B)構文の構造と制約 ～“Snake is high in protein”の生成のために～
10:50	発表 4	白井 沙都 (名古屋市大 4)	アメリカの幼稚園小中高授業から見る教師の発話分析 ～自然な classroom English のために～
11:05 休憩・時間調整			
11:10	発表 5	一見 亜美佳 (三重大学 1)	EXPLORING ACTIVITIES TO DEEPEN INTERCULTURAL UNDERSTANDING IN ELEMENTARY SCHOOLS 小学校における異文化理解を深める活動を探る
11:25	発表 6	山田 奈実 (三重大学 2)	An Affordance-based Approach to Teaching English Speaking at Elementary School 「小学校におけるアフォーダンス理論に基づく英語 スピーキング指導の方法」
11:40	発表 7	伊藤 美咲 (三重大学 3)	THE USE OF AUDIO MATERIALS IN ENGLISH TEACHING AT ELEMENTARY SCHOOL
11:55	発表 8	嶋 紗莉理 (三重大学 4)	FACILITATING COLLABORATIVE AND AUTONOMOUS LANGUAGE LEARNING IN ETANDEM
12:10 昼休み			
13:00	発表 9	白井 茉優 (南山大学 1)	Tips on Japanese-English translation in Terms of Comparing the Two Languages. 日英語の比較から学ぶ和英翻訳のコツ
13:15	発表 10	広瀬 奈々 (南山大学 2)	How to Express Japanese, <i>Omou</i> , in English in Terms of Construal Differences Between Japanese and English 日英語の捉え方の違いから「思う」の表現法の考察
13:30	発表 11	酒井 希実 (南山大学 3)	Preposition Idioms and Their Images 前置詞イディオムとイメージ
13:45	発表 12	橋本 美祐 (南山大学 4)	Differences in English and Japanese Situational Expressions Observed in Japanese Subtitles of Western Films 洋画のサブタイトルから考える日英状況表現の違い
14:00 休憩・時間調整			
14:05	発表 13	伊藤 美空 (南山大学 5)	Core Meaning of English Vocabulary 英語語彙のコアミーニング
14:20	発表 14	可児 春奈 (南山大学 6)	The Comparison Between BE-TO Construction and Auxiliary Verbs BE-TO 構文と助動詞表現の比較
14:35	発表 15	加藤 歩佳 (南山大学 7)	Difference of How We Think and Express in Japanese and English -From the Analysis of the Original and its Translation of Short Stories 短編の日英対比からみる、日本語と英語の考え方と表現の違い
14:50	発表 16	田中 杏奈 (南山大学 8)	A More Effective Way to Learn <i>Ei-jyukugo</i> (Idomatic Expressions) for High School Students 高校生のための英熟語のより効果的な学び方
15:05	参加者コメント、教員講評 (25 分)		
15:30	休憩と Breakout Session への移行 (10 分)		
15:40	Breakout Session で 3 大学学生交流会 (50 分)		
16:30	終了		

2日目： 1月30日（日）

時間	発表#	氏名（大学）	卒論題目
10:05	発表 17	竹内 康喜 (名市大 5)	make the N 構文の意味の不透明性について
10:20	発表 18	久田 茜 (名市大 6)	英語らしさの新たな一面：時間軸広角視点
10:35	発表 19	前田 恭佳 (名市大 7)	接尾辞-able を理解する為の語法研究 — 「able=できる」を超えて—
10:50	発表 20	松本 柚香 (名市大 8)	掲示英語における表現法と人の動かし方 NO SMOKING/DO NOT SMOKE/SMOKE FREE ZONE
11:05 休憩・時間調整			
11:10	発表 21	馬淵 萌子 (名市大 9)	直接話法における伝達文の研究 —say だけではない伝達文の表現法—
11:25	発表 22	鈴木 規亨 (名市大 10)	Image meme の定義 —meme の本質と魅力—
11:40	発表 23	大野 博司 (三重大 5)	A STUDY OF ECONOMIC ACTIVITIES BASED ON THE POLUSEMY OF ENGLISH COMMERCIAL VOCABULARY
11:55	発表 24	川北 成海 (三重大 6)	THE DIFFERENCES BETWEEN AMERICAN ENGLISH AND BRITISH ENGLISH IN GRAMMAR
12:10 昼休み			
13:00	発表 25	石田 早希 (南山大 9)	The Comparison of Japanese and English Expressions in Films based on Insect's View and God's View 映画における虫の視点・神の視点に基づいた日英比較
13:15	発表 26	小山 紗世子 (南山大 10)	Issues in English Education Observed From Differences in Attitudes Toward English Between Returnees and Non-returnees 帰国生と非帰国生の英語に対する態度の違いから見る英語教育の問題
13:30	発表 27	松井 柁人 (南山大 11)	Teaching English Writing Drawing on Cognitive Linguistics 認知言語学的観点から考える、英作文の指導法について
13:45	発表 28	佐羽内 亜海 (南山大 12)	A Consideration of How to Teach the differences between Japanese and English from the Viewpoint of "Insect View" and "God View" 虫の視点、神の視点から見る日本語と英語の違いの教え方の考察
14:00 休憩・時間調整			
14:05	発表 29	腰山 舞 (南山大 13)	A Study on Collocations: Compatibility Between Adjectives and Prepositions コロケーション研究：形容詞と前置詞の相性
14:20	発表 30	平 真輝 (南山大 14)	How Language is affected by its Culture 文化の言語(英語)に及ぼす影響
14::35	発表 31	上野 萌子 (南山大 15)	Texture Expressions in English and Japanese 日英語における食感言語表現
14:50	参加者コメント、教員講評 (30分)		
15:20	休憩と Breakout Session への移行 (10分)		
15:30	Breakout Session で 3 大学学生交流会 (50分)		
16:20	終了		

## 要旨

1日目： 1月29日（土）

10:05	発表 1	碧山 美奈 (名市大 1)	第三の統語的使役動詞 put
<p>日本語の「～させる」に対応する英語として語彙的使役と統語的使役がある。語彙的使役とは、<u>You surprised me.</u>や <u>His answer pleased me.</u>のように、動詞自体に使役的な意味があり一語で使役を表現できるものである。統語的使役には、make、have、get、let等の使役動詞の後ろに原形不定詞やto不定詞が続いて「…に～させる」という行為を表すもの(第一の統語的使役動詞)と、makeやgetのように“<u>He made(got) me angry.</u>”と後ろに形容詞が続いて「…を～という状態にさせる」というものがある(第二の統語的使役動詞)。本稿では、従来、使役として捉えられてこなかった動詞 put を用いた使役表現に着目し、第三の統語的使役動詞として提案したい。</p> <p>put を用いた使役表現として、“<u>He put us to work in the garden.</u>”(彼は私たちが庭で働かせた。)や“<u>I finally managed to put the baby to sleep.</u>”(赤ちゃんをやっと眠らせた。)が挙げられる。筆者には、これらの put 文は日本語における使役「～させる」に対応しているように思われた。そこで、本研究では put は使役動詞なのか、もしそうなら構造的な特徴・意味的な特徴を明らかにしたい。</p> <p>研究方法は、まず文法書や先行研究から「(統語的)使役動詞」の定義を挙げ、put がそれに当てはまることを確認した。次に、コーパスで put が使役として使われる場合の構造的な特徴を考察した。さらに、ネイティブへの調査から使役動詞 put の意味的な特徴を分析した。</p> <p>構造的な特徴としては、一般的な使役動詞は後ろに動詞が続くが、put の場合後ろに続くのは前置詞句である。使われる前置詞によって、6タイプあることが分かった。そして、put を用いた使役文は、「目的語が前置詞句で表す動作をするように、または状態になるように仕向ける」という意味になることが明らかになった。</p>			
10:20	発表 2	大柳 竜一 (名市大 2)	User Interface テキストを対象にした Google 翻訳と人間翻訳の比較 —UI 翻訳者の存在意義を求めて—
<p>本研究では、User Interface (UI：ソフトウェアの画面)に表示されるテキストを、機械ではなく人間が翻訳する場合の強み・人間の UI 翻訳者の存在意義を見出すことを目的とした。そのために、実際に UI で使われているテキストを Google 翻訳で翻訳し、人間である筆者による訳文と比較した。そして、Google 翻訳による訳文のうち、意味不明なもの、原文と違う意味になっているものを抜き出し、どういった場合に Google 翻訳がうまく翻訳できないのかを考察した。</p> <p>考察の結果、文法的に Google 翻訳がうまく処理できない箇所と、そもそも UI テキストの特質上 Google 翻訳がうまく処理するのが難しい箇所があることがわかった。</p> <p>文法的にうまく処理できない箇所は、例えば with が文に含まれる場合だ。この場合、Google 翻訳は with の別の意味で訳してしまうことが多かった。この背景には、with の持つ多義性とその意味判別の難しさがあると考えられる。</p> <p>一方 UI テキストの特質上 Google 翻訳がうまく処理できない箇所は、通常の文法では許容されない目的語の省略が行われていた。これは UI テキストの特殊性に起因するものであった。このため、こういった省略や含意が行われている箇所では、一般的な用途を想定している Google 翻訳では原文のニュアンスを正しく翻訳できないことがわかった。</p> <p>以上の結果から Google 翻訳の問題点と限界がわかり、人間である UI 翻訳者の存在意義を確認できた。</p>			
10:35	発表 3	川瀬 裕之 (名市大 3)	【A is B in C】(A は C が B)構文の構造と制約 ～“Snake is high in protein”の生成のために～
<p>Snake is high in protein. 「蛇はタンパク質が豊富です」という訳がある。この文の「タンパク質が豊富」を「*Protein is high.」と訳すと意味が通じなく、また in より後を抜いた「*Snake is high.」という文も非文となる。本稿ではこのような【名詞 be 動詞 形容詞 in 名詞】(A は C が B)文を【A is B in C 構文】と名付け独立した構文として体系的に紹介した上で、「C is B, A is B が成立しないような【A is B in C 構文】にはどんな構造があるのか」、という問いに「【A is B in C 構文】では本来別領域を形容する形容詞 B が A と C の名詞の関係性を同時に形容するという構造がある」という答えを出し、「【A is B in C 構文】を使用することでどんな効果が得られるのか」という問いに、「敢えて別領域の形容詞 B を使用することで B のバックグラウンド(本来 B が使われるような周囲の状態や話者の前提認識)を表すことが出来、話者はその B のバックグラウンドを表現」という答えを出した。</p>			

10:50	発表 4	白井 沙都 (名市大 4)	アメリカの幼稚園小中高授業から見る教師の発話分析 ～自然な classroom English のために～
<p>筆者は英語教員になるための準備の勉強としてアメリカの学校の授業風景を動画で閲覧していたら、授業中に教師が生徒に投げかける言葉で意外だった表現を度々見つけた。それは、自分が授業を行うときには思いつかないような表現で、教室英語表現集にも掲載されていないものであった。そこで、本研究では、アメリカの教員が良く使う表現で、筆者にとって意外に思えた表現を分析し、なぜそのような表現が意外に思えて好まれて使われるのか、考察する。そのために YouTube でアメリカの幼稚園から高校まで、計 35 本の授業風景の動画を閲覧し、教師の発話を分析した。その結果、文法知識の違いや、単に指示するだけでなく、クラスの良い雰囲気を作る、教師と生徒の望ましい人間関係を築き上げるための表現が好まれて多用されていることがわかった。</p>			
11:10	発表 5	一見 亜美佳 (三重大 1)	EXPLORING ACTIVITIES TO DEEPEN INTERCULTURAL UNDERSTANDING IN ELEMENTARY SCHOOLS 小学校における異文化理解を深める活動を探る
<p>本研究では、様々な他者の視点を低学年の段階から経験することで、他者との違いを知り、理解し、認め合う姿勢を身に付けられるのかを、映画のある場面を使用した活動を行い、調べた。データ収集の方法は児童の活動の様子を撮影したビデオと録音、児童がなりきりの際に使用していたスクリプトである。データの分析は、小桐ら (2019) を参考に、児童の意見を自己理解に関するものと他者理解に関するものをカテゴリーに分類しておこなった。その結果、この活動を通して、多くの児童は自分の考えを持ち、自分の意見と他者の意見を見比べることで他者との違いを知ることができていたが、その違いを受け入れる段階には達していないようだった。違いを認め合う姿勢の第一歩は違いを知ることである。今回は 1 度しか活動ができていないため、長期的におこなった時の結果はわからないが、長期的にこの活動をおこなえば、自他の違いに気づき、コミュニケーションを図ることで、自他についての理解を深められるのではないかと。</p>			
11:25	発表 6	山田 奈実 (三重大 2)	An Affordance-based Approach to Teaching English Speaking at Elementary School 「小学校におけるアフォーダンス理論に基づく英語スピーキング指導の方法」
<p>この研究はアフォーダンス理論に基づいた小学校における英語スピーキング指導の方法を探究することを目的とし、外国語活動の授業において机とイスを取り除くと、児童の WTC が変化するかを検証した。25 人の小学 3・4 年生の児童を対象に机とイスがある場合とそれを取り除いた場合の異なる 2 つの教室環境において、同様のスピーキング活動を実施した。データは児童の WTC を測るためのアンケート、授業についての自由記述アンケート、ビデオ撮影を通して収集された。その結果、次のことが明らかになった。事後アンケート結果において児童の WTC の平均値と中央値が下がり、最小値と最大値が上がっていた。また、ウィルコクソンの符号順位検定によって両者の平均の差を調べたところ、有意差は見られなかった。よって机とイスを取り除いた教室環境において、数値上児童の WTC の上昇は見られなかった。しかしながら、ビデオによる授業観察の結果、机とイスがない環境の方が児童の発言量と会話の回数が増え、声の大きさやリアクションが大きくなっていった。さらに、児童間の距離が非常に近くなっていたことから、机とイスを取り除くことで身体的な距離が近くなり、心理的な距離が縮まった結果、会話や発言が増えたことが分かった。また、自由記述アンケートにおいて数名が 2 つの授業を比較して机とイスがない授業を肯定する意見を記入した。これらのことから、スピーキング活動の際に机とイスを取り除くことは児童の WTC を促進する環境的要因の 1 つになり得ることが明らかになった。</p>			
11:40	発表 7	伊藤 美咲 (三重大 3)	THE USE OF AUDIO MATERIALS IN ENGLISH TEACHING AT ELEMENTARY SCHOOL
<p>本研究では、小学校の外国語活動の授業に The Accent Chant Method (ACM) を導入し、音楽的知能と第 2 言語学習との間に関係があるかどうかを調査した。眞崎 (2015) は、第 2 言語学習者のアクセント配置能力の育成に有効であるとして ACM を作成した。本研究では、そのチャンツを用いた主アクセント配置技能の育成には、音楽的知能を持つことがより効果的であるという仮説を立て、小学 3・4 年生の音楽経験や音楽に対する思いを明らかにした。paired-comparison t 検定と McNemar 検定の結果、1 度チャンツを体験した後のテストでは、全体としても個々の単語としても有意な差は見られなかった。また、Mann Whitney U-test を用いて、音楽経験のある生徒とそうでない生徒のテスト前後の成長率、音楽が好きな生徒と嫌いな生徒の成長率を比較したところ、こちらも差がないことが証明された。これは短期ではなく長期的な音楽教材を使用して英語の学習をするべきだろうということを示唆している。Praat を用いた英語と日本語の音声分析により、初期学習者は英語の音声的特徴や日本</p>			

語にある英語からの借用語の影響を受けていることがわかった。この結果から、教師は英語学習者の学習レベルに応じて学習する単語を慎重に選択する必要があることがわかった。今回の研究では、音楽に親しむことは英語に親しむ有効な方法であり、長期間にわたって英語に触れることが重要であるが、児童の多様な特性を考えると、多様な感覚を使って英語に親しむことが重要であると結論づけることができる。

11:55	発表 8	嶋 紗莉理 (三重大 4)	FACILITATING COLLABORATIVE AND AUTONOMOUS LANGUAGE LEARNING IN ETANDEM
-------	------	------------------	--

This study investigated how learners' international posture and English learning orientation change through eTandem language learning and aimed to foster their attitudes toward the international community and English learning. Japanese private high school students and international students from five countries participated in an eTandem project. Two psychological scale questionnaires were conducted before and after the project to analyze the changes in high school students' international posture and English learning orientations. The results showed that only eTandem learning once had a limited effect on improving the Japanese students' international posture and English learning orientation. However, the research above suggested that further study should consider how to encourage learners to have the willingness to communicate to the world, and foster intrinsic motivation to learn English, which is necessary for teachers to redesign a learning environment that enhances students' interest in different cultures and international activities, and builds their confidence in L2 communication.

13:00	発表 9	白井 茉優 (南山大 1)	Tips on Japanese-English translation in Terms of Comparing the Two Languages. 日英語の比較から学ぶ和英翻訳のコツ
-------	------	------------------	--

This paper gets to the points that I feel difficult in Japanese-English translation through four-year study at university. The purposes of this paper are to tell some tips on Japanese-English translation to Japanese learners of English and help them improve their English skills. This thesis consists of five chapters. Chapter 1 explains the reason why I decided to write about this theme. Chapter 2 offers two previous studies on the differences between Japanese speakers and English speakers. First, the theory on the difference of their viewpoints by Hinds (1986): Japanese speakers tend to abbreviate a subject while English speakers tend to have a subject, is introduced. Following that, the theory on the difference of their cultures by Matsumoto (1994): Japanese speakers make things ambiguous while English speakers make things clearer, is introduced. An analysis on tips on Japanese-English translation carried out by the researcher is introduced in Chapter 3. I compared some novels of Japanese versions with those of English versions. Then I introduced seven tips on Japanese-English translation that I noticed while investigating, Subject, Negative Expression, Tone of Voice, Ellipsis, Inanimate Subject, Conjunction, Punctuation, in this chapter. Its result and points to note are described and thereafter the discussion is presented. Next, I will offer three proposals for Japanese learners of English who have trouble in English writing based on the previous studies and the analysis, and after that consideration about English writing is written in this chapter. Lastly, conclusion is elicited so that Japanese learners of English can get the tips on Japanese-English translation. I hope that this paper will be the efficient instruction for Japanese learners of English.

13:15	発表 10	広瀬 奈々 (南山大 2)	How to Express Japanese, <i>Omou</i> , in English in Terms of Construal Differences Between Japanese and English 日英語の捉え方の違いから「思う」の表現法の考察
-------	-------	------------------	---

Is it effective to learn English relying on the literally translated Japanese sentences that sound unnatural to the ears of native speakers of Japanese? There are probably few words in Japanese and English that have the identical meaning or nuance because each language has its original culture and concept. Japanese people tend to use I think a lot when expressing their opinions; however, native speakers use different expressions depending on the situation and the degree of conviction. The reason in which Japanese learners of English use I think very frequently may lie in *omou*, many Japanese learners consider to be the Japanese equivalent of I think. This researcher conducted research to discover the conceptual difference between *omou* and I think. She collected 1030 phrases that include *omou* as translations in Japanese in Gogakuru. The result was the number of examples in which Japanese *omou* is expressed in a verb in English was 43. There are

four types of adjectives and 5 nouns that express omou. Lastly, 7 auxiliary and semi-auxiliaries were detected. 2

Having analyzed all the verbs the researcher found from the data, the characteristic that English is a Have-language, while Japanese is a Be-language was observed. From the definitions of English dictionary, she also found out that all of the verbs detected in the study derive from have.

The study also shows that the auxiliary verbs categorized into the middle modality or a small number of those categorized in low modality were used as a translation of omou in Japanese. Japanese learners of English should consider how to translate Japanese omou appropriately depending on situation.

In conclusion, the effective approach is to acquire the language concept. Cognitive Linguistic indicate the construal difference between Japanese and English, such as Be-language and Have-language. It is desirable to understand the difference between the Japanese language background and the English language background.

13:30	発表 11	酒井 希実 (南山大 3)	Preposition Idioms and Their Images 前置詞イディオムとイメージ
-------	-------	------------------	--

The purpose of this paper is to understand English idioms and phrasal verbs by considering them from a viewpoint of the image of prepositions. Background of this paper is the experience when I was a high school student, that I was confused with the idioms and phrasal verbs which have the same verbs.

In chapter 2, I clarified the image of in, on, and at. In has the image of being inside of a space. On has the image of something being attached to something else, which has a plain surface. At has the image of pointing somewhere with pinpoint accuracy. The images of the prepositions are metaphors from physical space to time space. I also considered how the meanings of each phrasal verb are related by the core images of the prepositions. The meanings of phrasal verbs and idioms change depending on the combination of the words, and each meaning is related to the core meaning of the preposition.

In chapter 3, I considered the idioms and phrasal verbs including to and for. To has the image of going in a direction and arriving at the destination, and it needs a target. For has the image of heading for a destination, and it does not need a target. I clarified the difference between to and for by using the phrasal verbs. The difference is whether the target is needed or not.

Chapter 4 discusses a proposal to learn the image of prepositions. Junior high school students must learn the images of prepositions in some contexts.

In conclusion, it is helpful for students to learn the images of prepositions to understand English idioms and prepositions.

13:45	発表 12	橋本 美祐 (南山大 4)	Differences in English and Japanese Situational Expressions Observed in Japanese Subtitles of Western Films 洋画のサブタイトルから考える日英状況表現の違い
-------	-------	------------------	---

The objective of the study reported here was to examine the English expressions in the Western films by comparing it with its Japanese subtitles, aiming to prove that they reflect the difference in ways of expressing situations between English and Japanese. The study refers to Situation vs. Person Focus by John Hinds, and Eigo no Kankaku by Yoshihiko Ikegami. They give several linguistic tendencies of English and Japanese. In this paper, the author uses five points of views, they are in Chapter 2; (1) expressing the situation individually (specifically) and expressing the situation generally, (2) person focus and situation focus, (3) action oriented and state oriented, (4) HAVE language and BE language, (5) mentioning the cause of the situation and avoid mentioning the cause of the situation. The author examined three films to find expressions and its subtitles that the ideas stated above apply to. Through the research, many expressions that are explained by the previous studies were found. In Chapter 3, 14 examples are selected and discussed. Five of them fit into (1), and several examples are applied to each of the other 4 ideas. It is confirmed that English dialogues and Japanese subtitles greatly reflect each linguistic tendency. The proposal for English learning by watching films are presented in Chapter 4. The author believes that learners might be able to learn better translations from subtitles since subtitles are not the direct translations of dialogues. Chapter 5 presents a conclusion and discuss direction for the future research.

14:05	発表 13	伊藤 美空 (南山大 5)	Core Meaning of English Vocabulary 英語語彙のコアミーニング
<p>Once, a junior high school student asked the researcher the difference between “support” and “cheer”. They were both translated into the same Japanese in the textbook he uses at school. That was the background of this paper. The purpose for this thesis is to see whether learning core meaning of English Vocabulary is effective for acquiring English, and this thesis especially focuses on synonyms. The researcher has done a survey on this topic. The participants were 24 junior high school students. They were expected to answer the questions about their situation of learning English vocabulary or their consciousness for acquiring English. Also, they were asked to write comments how they think about the core meaning method. Furthermore, they took a little quiz to see whether or not the core meaning method is effective. There were both positive and negative comments for the core meaning method. Although there were more positive comments than negative ones, the results of the quiz were not really good. The researcher considers the reason for this result, and there might not be enough explanation of each core meanings. The description and the way of using the core meaning method should be considered more if teachers actually use this method. However, the researcher believes that this core meaning method can make it easy for learners to see the difference of synonyms and help acquiring natural English.</p>			
14:20	発表 14	可児 春奈 (南山大 6)	The Comparison Between BE-TO Construction and Auxiliary Verbs BE-TO 構文と助動詞表現の比較
<p>The objectives of this study were to confirm the differences between BE-TO construction and auxiliary verbs and reveal the reasons why BE-TO construction can have 5 different meanings even though Bolinger (1977, preface) says “one form for one meaning, one meaning for one form”. This paper is organized as follows.</p> <p>In Chapter 2, the theoretical background is introduced. According to previous studies, the point of BE-TO construction is that there is a third person or a strong invisible power that occurs in the sentence. This strong nuance derives from the image of to. The core meaning of be is “existence” and the core meaning of to is “facing to each other” or “heading to a destination”. When these images are placed on BE-TO construction, it can be mentioned that the person stands on a position and face the action, do. This image is related to the meanings of BE-TO construction. On the other hand, auxiliary verbs only express the speaker’s opinions or feelings.</p> <p>Chapter 3 presents the survey on BE-TO construction and auxiliary verbs and then discusses what has been said. I asked native speakers differences between BE-TO construction and auxiliary verbs and if the word, to is related to the nuance of BE-TO construction. From their answers, it can be said that previous studies provided in Chapter 2 are correct and the meaning of BE-TO construction which is similar to can is like possibility. Besides, other differences are found. BE-TO construction sounds more formal and outdated. Moreover, BE-TO construction is more common in writing whereas auxiliary verbs are more frequently used in daily conversation. Reasons why BE-TO construction can have 5 meanings are that native speakers recognize one schematic image, and the five seemingly different meanings are all under the core image.</p> <p>Lastly, conclusion is offered in Chapter 4 after summarizing the thesis.</p>			
14::35	発表 15	加藤 歩佳 (南山大 7)	Difference of How We Think and Express in Japanese and English - From the Analysis of the Original and its Translation of Short Stories 短編の日英対比からみる、日本語と英語の考え方と表現の違い
<p>This paper aims to investigate the kinds of construal differences that appear in Japanese novels and its English translation. Between Japanese and English, there are many and huge differences. Of all the differences, in my opinion, the biggest factor that makes learning English difficult for Japanese English learners is the way things are expressed. Understanding those construal differences will allow Japanese English learners to reach deeper learning and longer retention of English.</p> <p>As a tool for Japanese English learners to learn English, researcher conducted a research comparing Japanese and English. Materials analyzed were Haruki Murakami’s two books, “Norwegian Wood” and “Kafka on the Shore”.</p>			



Through the research, many differences between Japanese and English were found. In this paper, the differences found are indicated by focusing on these three points: (1) difference of perspectives, (2) Be-language and Have-language and (3) onomatopoeia. About the difference of perspectives, the research clearly shows that Japanese have a situation-focus, *mushinoshiten* (the insect's view) and movable point of view. On the other hand, English has a person-focus, *kaminoshiten* (the god's view) and an immovable point of view. Also, the research found out the categorization that Japanese is *Be gengo* (Be-language) and English is *Have gengo* (Have-language). In addition, the research reveals that Japanese tends to use onomatopoeia, an expression method that captures what the speaker feels without analyzing the situation, and English does not. However, there were also exceptions to the theory shown above. This paper does not mention all the differences between Japanese and English.

Also, since this research deals with only two novels, many novels are yet to be compared between Japanese and English. The study concludes that further research is needed to make people more aware of the difference between Japanese and English.

14:50	発表 16	田中 杏奈 (南山大 8)	A More Effective Way to Learn <i>Ei-jyukugo</i> (Idomatic Expressions) for High School Students 高校生のための英熟語のより効果的な学び方
-------	-------	------------------	---

Now, most Japanese high school students feel it difficult to learn *Ei-jyukugo*. *Ei-jyukugo* is expressions with idiomatic meanings and is composed of more than two words. It is categorized into sayings, proverbs, phrasal verbs, idioms, frozen similes, formulaic expressions. The biggest reasons that high school students are not good at *Ei-jyukugo* are they have a big amount of *Ei-jyukugo* that they should memorize, their teachers' way of teaching *Ei-jyukugo*, and the idiomatic meaning of *Ei-jyukugo*, the meaning of which is not easy to guess. The researcher conducted a survey on the current situation of students' way of learning *Ei-jyukugo*, and how English teachers teach *Ei-jyukugo* to find out what method to learn *Ei-jyukugo* is effective. As a result, it was found that the cognitive way that focuses on the core image and the origin of *Ei-jyukugo* based on Cognitive Linguistics will be effective for Japanese high school students. It also found the possibility that the cognitive way leads to deeper understandings and longer retention. In high schools, this cognitive way can be introduced to the students. However, English teachers do not have to teach their students all of the images or the origin of each *Ei-jyukugo* in class. It takes much time to complete to teach all of them. Instead of that, they can perform the lecture for the students to acquire the use of cognitive way in the classes. To capture English as images will be helpful for them to understand *Ei-jyukugo* more deeply. Therefore, the cognitive method has more advantages and is of help especially to Japanese high school students to learn *Ei-jyukugo* more effectively.

## 要旨

2日目： 1月30日（日）

10:05	発表 17	竹内 康喜 (名市大5)	make the N 構文の意味の不透明性について
<p>本稿は、make the list, make the team など、動詞 make が定冠詞付きの名詞 (the N)を目的語にとる文を「make the N 構文」と呼び、その特異性を論じる。一般に定冠詞はその名詞(N)が話者と聞き手の間で了解済みのモノであることを示すと言われている。この説明によると、make a list は「あるリストを1つ作る」となり、make the list は「そのリストを作る」となる。しかし、make the list には Dawn French was the only woman to make the list. (女性ではドーン・フレンチが唯一ランクインしました。)のように、「リスト入りする」という、異なる(しばしば意外な)意味でも使われることがある。本稿では「そのリストを作る」のような意味を「透明な意味」、「リスト入りする」のような意味を「不透明な意味」と呼び、この構文の意味の不透明性を考察した。</p> <p>辞書やコーパス、インターネットなどから収集した make the N 構文の用例を分析した結果、make the N 構文の意味の不透明性は以下の2つの要因に起因するのではないかという仮説に至った。(1)その名詞の多義性、(2)この構文における the の特別な役割(その名詞から連想される一連の行為の完結を示す役割)</p>			
10:20	発表 18	久田 茜 (名市大6)	英語らしさの新たな一面：時間軸広角視点
<p>文の組み立てにおいて、日英語間で違いが生じる。この根本的な違い(英語らしさ・日本語らしさ)について、先行研究では様々な対比的な説明がされてきた(HAVE 言語(英語)対 BE 言語(日本語)、事実志向(英語)対 立場志向(日本語)、スル言語(英語)対 ナル言語(日本語)、person focus (英語)対 situation focus (日本語)など)。これらの対比にはそれぞれに説得力があるが、筆者にはそれ以外にも英語らしさが表れる一面があるように思われた。そこで英語らしさの新たな一面を明らかにすべく、筆者が英語らしいと感じる英文を集めて分析した。すると「英語は事態を時間的に広角な視点でとらえて、その時間幅の中で起きている推移を一文で描写する」という志向があるのではないかという仮説にたどり着いた。</p> <p>この仮説により、無生物主語や現在完了など様々な英語らしい構文に一貫した説明が可能になると考える。そしてそれにより、英語らしい表現の理解度や使いやすさが増すのではないかと。</p>			
10:35	発表 19	前田 恭佳 (名市大7)	接尾辞-able を理解する為の語法研究 — 「able=できる」を超えて—
<p>接尾辞として-able がつく形容詞は、believable や available のように「～できる」と訳すと思ってしまう。しかし-able を辞書で調べると、「できる」以外にも「に適した」、「に値する」、「しやすい」、「の性質を持つ」、「の状態の」、「を好む」など、一見「できる」とは関係ないような多様な訳が書かれている。そのほかにも例えば readable は「読むことができる」という意味以上に、「読んで面白い」という意味を持っている。筆者は、そうした-able 形容詞を見たときに「できる」からは想像できないような意味を-able に持たせることがあるという点に疑問を持った。</p> <p>そこで本稿では、このような-able の多様な訳をどのように考えたら理解し使いこなせるようになるのかについて考察する。考察の結果、-able は2つのコアイメージを持つという仮説を提示することで-able 形容詞をよりシンプルに捉えることを試みた。本稿では第一のコアイメージである「できる」に加えて新しく第二のコアイメージとして、形容詞の修飾する名詞が話し手に「～させる」といった使役的かつ半強制的な要素を持つことを提案する。</p>			
10:50	発表 20	松本 柚香 (名市大8)	掲示英語における表現法と人の動かし方 NO SMOKING/DO NOT SMOKE/SMOKE FREE ZONE
<p>看板等の掲示で使われる英語の表現法の違いの背後には何があるのだろうか。掲示という限られたスペースでは使用する言葉や文法が厳選されているにも関わらず様々な表現法が存在する。先行研究では、掲示英語を直接要望型・情報(提供)型・威嚇型などレトリックの表現法から分類したものや、文法やポライトネスの面から日英を比較したものなどがあり、これらの分類はもっともである。しかし、同一内容を伝える掲示にも様々な表現がありその使い分けに対しては疑問が残った。掲示文は単なる書き言葉ではなく、情報、警告、指示などを人々に示すことで人々の行動に影響を与えるものである。従って、掲示を出す人が掲示を見る人をどう動かしたいかが表現の使い分けに深く関係していると考え、各表現の背後にあるメッセージ性と「人の動かし方」を明らかにすることを研究目的</p>			

<p>とした。また、先行研究が考察のデータとして用いたのは掲示のテキスト部分のみがほとんどで、画像が使用されている研究はごく一部であった。本稿はテキストのみでなく実際の掲示を用いて絵やヘッドラインも分析の対象とした。考察の結果、掲示文は「人の動かし方」を基準として次の5種類に分類できると考えた。「指図のままに行動させる (DO NOT EAT など)」「ルールに基づく行動をさせる (NO SMOKING など)」「常識に基づく行動をさせる (WET FLOOR など)」「理想に向かわせる (KEEP THIS AREA CLEAN など)」「協力者・理解者にさせる (PLEASE ALLOW OUR GRASS TO GROW THANK YOU など)」</p>			
11:10	発表 21	馬淵 萌子 (名市大 9)	直接話法における伝達文の研究 —say だけではない伝達文の表現法—
<p>英語の話法には発言をありのまま引用して伝える直接話法(例: "I'm tired." he said.)と発言を伝達者の言葉に言い換えて伝える間接話法(例: He said that he was tired.)がある。直接話法は引用文(引用符(" "))の部分と伝達文で成り立っている。間接話法については引用文が疑問文、命令文、提案かによって ask 〈尋ねる〉、order 〈指示する〉 suggest 〈提案する〉など伝達動詞の使い分けが詳しく記述されている。一方で、直接話法は一般的に伝達動詞 say が用いられるだけの非常に単純なものとして記述されているに過ぎない。しかし、実際には、say だけでなく、cry 〈泣く〉、smile 〈笑う〉、nod 〈うなずく〉なども直接話法で用いられていることを知り、その表現方法はさらに研究する価値があるのではないかと筆者は考えた。そこで、以下の3点を明らかにすることを本稿の目標とした。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. say 以外にどのような伝達動詞が用いられるのか</li> <li>2. どのような語句が伝達動詞と共起するのか</li> <li>3. 伝達動詞や共起語はジャンルにより違うのか</li> </ol> <p>これらを明らかにするため、いろいろなジャンル(小説/新聞/雑誌)から直接話法の用例を集め考察した。考察の結果、伝達動詞は say だけでなく snap 〈ひったたく〉や clutch 〈ひっかく〉、や look 〈見る〉のように発話を表さない動詞なども使われていること、多様な副詞や前置詞句、現在分詞～Ving と共起していること、ジャンルによって明確な違いがあることが分かった。</p> <p>直接話法は今まで、間接話法と比べると単純なものとして扱われてきた。しかし、実際は say だけではない表現法を有しており、間接話法と同じ、もしくはそれ以上に表現の幅が広いものであると考える。</p>			
11:25	発表 22	鈴木 規亨 (名市大 10)	Image meme の定義 —meme の本質と魅力—
<p>meme は英語圏独自のインターネット文化でインターネット上では大きな文化を築き上げている。しかしそのメッセージと媒体は様々で種類も多いためその全貌を理解するのは難しい。実際に先行研究の定義を見てもどれも曖昧な定義が多いため、より meme への理解を妨げている。本稿では meme の中でも画像を媒体としたものに注目し、「Image meme」と名付けその特徴と本質をとらえることで明確な定義を打ち出すことを模索した。その結果 Image meme には作り手と読み手の「共感」による相互的關係が本質として存在しそこから生まれるリアクションを具体的な行動として誘発させ、画像と文のシナジーによってユーモアやジョークを生み出していることがわかった。それをもとに Image meme は「画像と文を組み合わせることでユーモア、ジョークの性質を生み出しそれを見た人に何かしらのリアクションを起こさせる画像」であるという定義を提案した。</p>			
11:40	発表 23	大野 博司 (三重大 5)	A STUDY OF ECONOMIC ACTIVITIES BASED ON THE POLUSEMY OF ENGLISH COMMERCIAL VOCABULARY
<p>本論文では商業及び通商に関する基本的な語彙の歴史を追い、意味の発展の仕方における共通点や相違点などを考察する。商業の概念を表す語彙として business, commerce, industry、商業行為として work, sell, buy, trade、商業活動の場所として store, shop, market、商売に必要な物品として money, coin を扱う。</p> <p>business, commerce, industry はどれも経済活動全体を示す言葉ではなかったが、大航海時代の最中に意味が変化していった。人と人との間で行われていた商行為から離れた地域や国家間のやり取りに規模が拡大していったことで経済活動の概念も変化していったと言える。</p> <p>商行為を表わす work, sell, buy は元々現在と同じような意味合いを持っていたが、trade は道や行動指針を示す語で 16 世紀後半に現在の意味を持った。労働や売買行為そのものは 10 世紀以前からある行為であり、貿易は大きな交易網が形成されてからできた行為であると考えられる。</p>			

<p>商業活動を行う場所を表す類義語の store, shop は中心的意義で異なっている。store は蓄えに注目されるが、shop は働く場所としての側面が強い。market は現在と同じく市場を意味したが、場所よりも集いの意味が重視されている。</p> <p>商売に必要な物品としての money にはローマ神話に由来する説がある。一方 coin は楔形のもの指して貨幣を coin と呼ぶようになった。money は貢物としての側面も持っていたためお金全体を指すが、coin はその形から硬貨を表している。</p> <p>今回調べた経済に関する語彙の多くは大航海時代の前後で変化し、経済の規模が大きな影響を与えていると言える。</p>			
11:55	発表 24	川北 成海 (三重大 6)	THE DIFFERENCES BETWEEN AMERICAN ENGLISH AND BRITISH ENGLISH IN GRAMMAR
<p>本論文はアメリカ英語とイギリス英語の文法的な差異を探ることを目的として作成した論文である。第一章では歴史的事実と言語的歴史をもとにアメリカ英語の歴史について述べる。アメリカ英語の歴史を3つの期間に分け、イギリス各地域から流入した英語のアメリカ国内での分布や拡大、その後のアメリカ英語としての変化について述べる。第二章では文法的差異の一例として仮定法現在を取り上げる。イギリス英語では近代英語の初期に mandative subjunctive の形が廃れて「should+原形」の形が生まれたが、アメリカ英語ではイギリスから流入してきたころの仮定法現在の形が現在も生き残っている。イギリス英語では、従属節内の動詞が不定詞形であると再解釈されたうえで、法助動詞 should が直前に挿入されたとされている。The Brown family of corpora を用いて仮定法現在と法助動詞 should を用いた節の使用頻度を比較する。mandative subjunctive の使用頻度が現在イギリス英語において復活していることから、国際社会において重要な役割を果たしているアメリカ英語が本国であるイギリス英語に大きな影響を与えていると考えることができる。</p>			
13:00	発表 25	石田 早希 (南山大 9)	The Comparison of Japanese and English Expressions in Films based on Insect's View and God's View 映画における虫の視点・神の視点に基づいた日英比較
<p>This paper especially focuses on the comparison between Japanese and English expressions in films based on the “Insect’s view and God’s view,” which is advocated by Kanaya. He insisted that Japanese is an Insect’s view language because speakers and listeners grasp situations from the same perspective while English is a God’s view language because speakers explain situations from the objective perspective as if they were seeing the world from above in the sky.</p> <p>There are two reasons why I chose this topic as the theme of my graduation thesis. Firstly, the comparison based on Insect’s view and God’s view in films is not verified in previous studies. Secondly, the previous research of Insect’s view and God’s view is limited to example sentences in the Japanese language. Therefore, this paper endeavors to verify these two points.</p> <p>I used two films for this survey. The first one is “Howl’s Moving Castle,” which is a Japanese film and the second one is “Harry Potter and the Sorcerer’s Stone,” the original version is in English. I collected English subtitles from each film and chose sentences which are applied to the previous theories. Then, I organized the data by theories and analyzed the tendency observed in the data.</p> <p>From the previous research and current survey, it is clarified that the verification of the theory, Insect’s view and God’s view, is supported both theoretically and practically in literary works and films.</p> <p>Finally, further research should be undertaken to clarify a fundamental difference between Japanese and English in terms of ways of thinking.</p>			
13:15	発表 26	小山 紗世子 (南山大 10)	Issues in English Education Observed From Differences in Attitudes Toward English Between Returnees and Non-returnees 帰国生と非帰国生の英語に対する態度の違いから見る英語教育の問題
<p>The author started this study because she was surprised by the fact that there were so many people around her who were not good at English. Since she herself liked English, she wondered what the difference was and came up with the answer that the attitude for learning English was different, which she decided to study.</p> <p>For this study, she conducted separate surveys on English among returnees and non-returnees, including a survey on their attitudes toward English, a survey on English learning, and an interview on their opinions of English education in Japan. From the results of this survey, the author was</p>			

able to discover differences in attitudes toward English depending on the learning environment and the content of study, as well as problems with English education in Japan as perceived by those who have actually received English education in Japan. One of the many problems cited with English education in Japan was the overwhelming lack of opportunities to communicate. Grammar tends to be taught in detail, but so much time is spent on it that there are few opportunities for communication and exposure to native English speakers. This creates a situation where people think they are not good at English because they cannot speak or hear English even though they are supposed to study a lot in schools.

After completing this study, the author hopes that more students will have the opportunity to communicate and be exposed to native English speakers in their English classes at school, and that as many students as possible will experience the joy of learning English.

13:30	発表 27	松井 柁人 (南山大 11)	Teaching English Writing Drawing on Cognitive Linguistics 認知言語学的観点から考える、英作文の指導法について
-------	-------	----------------------	--

English writing is a burden on both students and teachers. One of a students' burden is rote learning and teachers' burden is giving convincing explanations for their students. A teaching method which is based on cognitive linguistics' sense would contribute to relieving their burden. This paper picks up three confusing expressions for Japanese as follows: (1) be and have, (2) passive voice, and (3) omou and think, and consider an effective teaching method for the expressions. To build the teaching method, this paper has two surveys, investigating students' writing skills and their demands for writing classes. From surveys, I found that students' confusions are following mentions of previous studies; however, practice would improve their proficiency. In addition, students need more opportunities for language activities and speaking in writing classes, and they are annoyed at learning the same category words at different times. Finally, I propose a teaching method for writing based on previous studies and my surveys.

13:45	発表 28	佐羽内 亜海 (南山大 12)	A Consideration of How to Teach the differences between Japanese and English from the Viewpoint of "Insect View" and "God View" 虫の視点、神の視点から見る日本語と英語の違いの教え方の考察
-------	-------	-----------------------	--

The purpose of this paper is to clarify the construal differences between Japanese and English, and to propose the efficient way of teaching and learning English for Japanese learners in reference to the construal differences between Japanese and English. This study focused on the train announcements of Tokaido-Shinkansen. Japanese version of the announcements and English version of the announcements were compared. The author found that English version announcements are written in critically different ways from the Japanese announcements in terms of the speakers' viewpoint. In current English education in Japan, a learning method focusing on the construal difference between English and Japanese has not been adopted. The author also analyzed the illustration of English textbooks that many Japanese students use and found that there are few illustrations to help the students notice the difference between Japanese and English perspectives. Thus, the author proposed the better illustrations of English textbook for Japanese learners of English based on the construal differences between English and Japanese and proposed a more effective way of teaching for English learners to be aware of the difference between English and Japanese.

14:05	発表 29	腰山 舞 (南山大 13)	A Study on Collocations: Compatibility Between Adjectives and Prepositions コロケーション研究：形容詞と前置詞の相性
-------	-------	---------------------	--

In 2021, English has become a global language, and the Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology (MEXT) regards improving its skills as a matter of urgency and it also requires students to get cross-cultural understandings. However, Japanese people are often said not to be good at English. Kondo and Matsutani (2013, p.203) indicated that one of the reasons is lack of knowledge about words' combinations. These combinations are generally called collocations. That is why the researcher set them as the theme of her graduation thesis. Based on the research, the paper suggests an efficient collocation-learning in the perspective of cognitive linguistics. Additionally, the paper also focuses on the difference between English and Japanese

translation, then tries to explain it connected to cultural backgrounds. That is, this research aims to help Japanese learners of English to master English efficiently and to gain understanding of the diversity of cultures by learning collocations in terms of cognitive linguistics.

14:20	発表 30	平 真輝 (南山大 14)	How Language is affected by its Culture 文化の言語(英語)に及ぼす影響
-------	-------	---------------------	--

This thesis considers the difference between Japanese and English in terms of culture. By analyzing how language is affected by its culture, this study aims to find an effective way for English education in Japan. This study is mainly based on a previous study: Cultural Transformational Rules (CTR) by Matsumoto (2014).

This study is narrowed down to the “You VERB me” construction. The method of this study is as follows: First, which expressions with “You VERB me” construction are frequently used by native English speakers is examined, by using the Corpus of Contemporary American English (COCA). Second, the survey on native speakers about the results of COCA was conducted. The researcher asked the participants to describe in what situation they use the expressions. Next, data analysis about the answers of the survey was conducted. The results were categorized into three groups of similar meanings. Lastly, the ways of English education based on the results of the survey are proposed.

Discovery and proposal are provided. From the survey, it is found that English speakers have CTR of equality, individual, assertiveness and man-made. Using these CTR, two ways of English education are proposed: that is introducing of (1) assertiveness training and (2) more use of ICT.

14::35	発表 31	上野 萌子 (南山大 15)	Texture Expressions in English and Japanese 日英語における食感言語表現
--------	-------	----------------------	--

This paper focuses on the difference of texture expressions between English and Japanese, in order to clarify that we cannot simply translate English into Japanese and vice versa in terms of cognitive linguistics. The reason why we cannot necessarily translate with equivalents is that how to categorize things or situations depends on each language, and the meaning that the word covers is different between English and Japanese. If we learn English by just memorizing the equivalents in Japanese, we might miscommunicate with native speakers. Instead of the complete translation, we can understand English with the ‘core image’ based on cognitive linguistics. The ‘core’ means the simple, abstract, and essential meaning of the word (Tanaka, 2007, p.2, 2008, p.12). This idea can be applied to the difference of texture expressions between English and Japanese as well. I had conducted the survey to observe how differently texture expressions in English and Japanese are used, and why Japanese people feel it awkward to hear them in English, by collecting the data from YouTube videos and a questionnaire. Through the survey, I found the difference tends to be related to whether the food is dried or wet. Most Japanese texture expressions cover the image of either dryness or moisture, while English has some texture expressions which cover both of them. Moreover, such differences might be explained by ‘Insect’s Viewpoint and God’s Viewpoint’ (Kanaya, 2019). Thus, since how people construe the situation is different between English and Japanese, the idea of the core image based on cognitive linguistics should be introduced into English learners in Japan to learn the essence of English and to communicate with native speakers for more fun.